

かながわの

2017

学びづくりプラン

10年間継続してきた「かながわ学びづくり推進地域研究委託事業」は、平成27年度で政令・中核市を除く全ての県内各市町村で実施されました。そこで、平成28年度の「かながわ学力向上シンポジウム」では、基調提案、パネル・ディスカッションをとおしてこれまでの学びづくりの成果と、これからの学びづくりについて考える機会としました。

笠原顧問は、これまでの「学びづくり」の成果と今後の取組について、次のように整理しました。

成果・効果

- 県の施策として10年間継続
→「学びづくり」という言葉が定着
- 政令・中核を除く全ての市町村で実施
→多くの研究者等が県内の学校に関わる
- 保護者・地域に開く（拓く）
→「学び」を核としてのつながり

- 県の施策として10年間継続し、県と市町村が具体的に取り組んできたことは、一つの成果である。
- 多くの研究者の方々が学校に関わり、専門的な知見による裏付けによって先生方の取組を価値付けられたことに大きな意味がある。
- 情報を開き、学校が抱えている課題を保護者・地域の方と共有することで、学校への協力をいただけた。



神奈川県教育委員会
笠原 陽子 顧問

「情報・課題」の共有から、「行動」の共有へ

次の10年につなげるために

「何をやってもらえるか」から
「自分に何ができるか」へ



そのために、
行政は、「仕掛け」をつくる
学校は、先生方の強みを活かす
PTA・地域は、マンパワーを活かす

- これからの10年は誰かが何かをやってくれるという発想から、自分自身がやっていくという、そういう主体に変わっていく必要がある。
- 行政も、学校も、PTAも、地域も、大人の社会の責任として当事者意識をもって、子どもたちの教育に取り組んでいかななくてはならない時代に来ているのではないだろうか。



会場からの声

- 何をしてもらえるのかではなく、自分では何ができるのか、少しでも子どものために考えたいと思いました。
- 現状をしっかりと分析し、先へ将来へとつながる視点をもつことの重要性を感じました。
- 学びづくりの主体は地域であり、それぞれの立場で自分のできることを取り組んでいけるよう仕掛けを作りたいと思いました。

「価値」を見出し、次のステージへ

きっかけと価値を見極める

きっかけから価値へと導いてくれるものは？

きっかけがあり、価値が生まれる

価値を見出すきっかけが必要

まずはやってみる！

価値を見出せたか

PDCAをまわすことが目的ではない。価値を見出せば、自然とPDCAが回される。

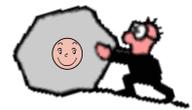
□「学びづくり」が最終ステージではなく、「学びづくり」がきっかけで始まらなくてはいけない。そんなふうに思う。

□「学びづくり」をやられた先生方の中で達成感が出てくる。それが私は非常に重要な部分かなと思っています。



横浜国立大学
池田 敏和 教授

□大きい石に喩えてみる。大きい石はなかなか動かない。転がらない。最初が大変です。一歩目が一番動かない。こんなこと、やらなくていいならやりたくない。でも、何かのきっかけで動かざるを得ない、転がさなくてはいけないとなり、転がしてみる。転がしてみるといろいろなものが見えてくる。よさが見えてくる。動いているのを押すのは簡単です。一旦止まってしまうと、また重い石を動かすのは一苦労です。



会場からの声

- 答えのない問題に最適解を見つけようと努力することが大切だと思いました。
- 「とにかく、やってみる！！」ことが大切だと思いました。価値を見出して次につないでいけるよう、働きかけをしていきたいと思いました。
- 価値を見出して楽しめるように、そんな気持ちで仕事をしていきたいです。
- きっかけは大切。きっかけから価値が生まれることに共感しました。

「やらされる研究」から「やりたい研究」に ~ 大磯町立大磯中学校 ~

<授業研究を中軸に据え、研究を推進>

- 当初は授業研究に関して、多忙感からか、意欲的に取り組めない雰囲気もあった。しかし、経験の浅い教員が多く、もっと良い授業をしたいという意欲があることも分かった。そこで、若手教員の率直な不安や困り感に、管理職や先輩教員が応える場を意図的に設定した。その結果、明日の授業が楽しみだ、もっと授業改善の勉強がしたいという声が聞こえ始めた。
- 県教委から「学びづくり」の研究を委託されたからやるのではなく、授業を行っている中での課題解決のために研究を始めることで、実践研究となり、校内研究が活性化していった。
- また、教育活動の優先順位の一番は授業であるという管理職の考えのもと、他の業務軽減にも取り組み、授業研究を中軸に据えた学校運営を推進することができた。

授業研究を推進するための業務改善

- ア 会議の時間を短縮した。
- イ 会議資料には必ず終了予定時間を明記する。* 最長90分
- イ 学習指導案の様式を変更した。
- ウ A4版1枚で単元全体が網羅されるような様式にした。
- エ 単元全体で「付けたいか」や、その評価が明確になるようにした。
- ウ 打ち合わせをなくし、ネットワークの掲示板を活用するようにした。
- エ 年間指導計画や学級経営案の様式を変更して、保護者に配布するようにした。
- オ 校務分掌を改訂し、指導部をまとめて会議の回数を削減した。
- * 職員会議は2ヶ月に1回
- カ 毎週1回(水曜日)、/一授業子-を設定した。

私たちががんばりましたね！



どうですわ！



会場からの声

- 自分の学校でも、授業研究をするための土壌づくりをはじめ、先生方が授業づくりを楽しんでできる環境を作りたいです。
- 校内研の活性化→授業力の向上(教員のやる気、意欲の高まり)はとても重要な視点であり、本校でも大事に考えています。

教師の多忙感をどう充実感にかえていくか ～ 大井町立大井小学校 ～

<明確な「ゴール」と「見える化」により、「やりがい」をもつ>

- 一生懸命に努力していることが報われないときには多忙感を感じ、それは徒労感ともなる。しかし、仕事は忙しくても自分なりに成長しているとき、手ごたえがあるときには、充実感があり、仕事への意欲もわいてくる。
- 「子どもが荒れるのは、授業がつまらないからである」という現実を直視し、そのためにも授業の充実に力を入れるために自主研究発表会というゴールを設定した。どこの学校も何年かごとに行っていた自主公開研究会であるが、児童指導の問題や多忙化を理由に少なくなっているのが現状である。原点に戻りそこに力点をかけるという学校本来の具体的な学びづくりのコンセンサスを再認識する時であると考えている。
- 精神論や最終目標だけでは人は動かない。具体的な学びのシステムづくり、具体的な取組方法などの「見える化」を合言葉に取り組んでいるところである。
- 「面白いからやってみよう」という風土を作っていくことが、いいきっかけになるのではないかと。



横浜国立大学
青山 浩之 教授

○きっかけは大事ですね。自主研究発表会が降ってくると思うと、それは徒労感とつながっていくのですが、「やってみよう！」のきっかけづくりに、良いものをたくさんもっている若手の先生方の能力をいかす。それで学校がうまく動いていくように道筋を作っていくことができるのではないかとのお話ですね。

会場からの声

- ミドル世代を活用した学校づくりの例が参考になりました。
- もっと力を抜いてよいのではという言葉がとても印象に残りました。
- 意見の相違は価値が生まれるきっかけなのだと思います。

つながりをつくるには ～ 海老名市教育委員会 ～

<教職経験の高い先生が小中連携のきっかけをつくる>

- 教育経験の高い先生が小学校の乗り入れ授業を担当している。中学校に戻ると、若手、中堅の先生に、話した。「やっぱり小学校の授業を見に行かないとダメだよ。自分は見に行き、『目からうろこ』で本当に勉強になったよ。うちの中学校の1年生を見直して、どこでつまづいているかみんなで研究しようよ。小学校でそれを伝えてやり取りしてくるから。」

<学校と地域、保護者とのつながり、お互いの信頼を高めていく>

- 地域の方たちであるとか市民の皆さんに必死になって発信をしている。全国学力・学習状況調査の結果をホームページで発信したり、地域に出かけて行って市教委が説明したりしているが、実際には手を上げてもらったら1人も見ていなかったという現状も。直接発信することももちろん大事だが、どうやって保護者の方地域の方と学校を繋ぐか、今「これだ！」というのがない。コミュニティ・スクールを推進することで、そこを大事に繋げていけるのではないかと、視点が少し変わった。

会場からの声

- つながりや連携の大切さを感じることができました。
- 校内研に保護者や地域の人を入れていくのはいいなと思いました。多様な意見をもらうことで、大きく変容する可能性があります。校内研でいかに同じ方向にみんなで向かっていくかが、非常に難しいと思います。

かながわ元気なネットワークの推進と学びづくり

神奈川県教育委員会では、いじめや暴力行為、不登校など児童・生徒の様々な課題に対して、教育指導、生徒指導が一体となった総合的な取組が欠かせないと考えています。

すべての学校や地域に子どもたちの笑顔があふれることをめざし、学校、保護者、関係機関・団体等、地域社会全体が一体となった取組を推進するために、「かながわ元気な学校ネットワーク推進会議」を平成23年度に設置し、産・官・学・民の代表から構成される委員から提言・指導・助言をいただきながら、次の3つの考え方を基本に据え取組を進めています。

事業推進の基本的な考え方

発想の転換

「問題解決」から
「価値の探究」へ
強みを見つける

方策の転換

「トップダウン」から
「ボトムアップ」へ
対話する

意識の転換

「やらされ感」から
「面白がって」へ
自分が取り組む

県教育委員会ではこれらの考え方を基に、様々な事業を次の3点に整理し、プロジェクトとして市町村教育委員会と協力しながら取組を進めています。『学びづくり』の推進は「魅力あるプロジェクト」の中に位置付けられています。

各プロジェクトの取組

魅力ある学校づくりプロジェクト

学びづくり推進研究委託事業

政治的教養を育む教育の推進

学級経営支援事業

いのちを大切に作る心を育む推進事業

等

いのち守り合う関係機関との 連携・推進プロジェクト

スクールカウンセラー活用事業

スクールソーシャルワーカー活用事業

子ども若者支援プログラムの普及

等

支え合う地域との協働推進プロジェクト

コミュニティ・スクール促進事業

小中一貫教育推進事業

スクールライフサポーター派遣事業

等